

地盤内構造物の動的応答解析への積分方程式法の応用

東海大学海洋学部 学生員 ○根川 康一
 東海大学大学院 学生員 川上哲太郎
 東海大学海洋学部 正員 北原 道弘

1. 語言

積分方程式法は、対象とする境界の形状が複雑な場合や、領域が無限遠を含む問題などに対し有効な数値解析手法であることが知られている。また、この手法では未知量が境界上のみに存在するので、未知数を減らすことができるので、境界上の値を高精度に求めることができるという利点も有している。

本研究は、この積分方程式法を用いたことによつて、2. 無限弾性体中に空洞が存在する場合における、空洞上の変位および周辺応力の解析を行つたものである。

2. 基礎式および諸条件

Fig.1に示すような外部領域Dにおいて、均質・等方な線形弾性体の基礎式は次のようである。

$$\mu \Delta U + (\lambda + \mu) \nabla \cdot U + \rho b = f \quad \dots (1)$$

b : 物体カクタル λ : Lame定数 ∇ : Gradient
 U : 変位ベクトル μ : 密度 f : 時間微分 Δ : Laplacian

初期条件 $U(x, 0) = U_0(x), \dot{U}(x, 0) = V_0(x) \quad x \in D$

境界条件 $U(x, t) = \bar{U}(x, t) \quad x \in \partial D_u \quad \dots (2)$

$$T(x, t) = \bar{T}(x, t) \quad x \in \partial D_t \quad T(x, t): \text{境界表面力} \quad n: \partial D \text{上の単位法線ベクトル}$$

さらにDが外部領域であるため、散乱場 $U_s(x, t) = U(x, t) - U_I(x, t)$ は $|x| \rightarrow \infty$ のとき、次の放射条件を満足しなければならない。

$$\frac{\partial U_{ss}}{\partial r} + \frac{1}{C_L} \frac{\partial U_{ss}}{\partial t} = O(r^{-\frac{n-1}{2}}), \quad U_{ss} = O(r^{-\frac{n-3}{2}}), \quad \frac{\partial \bar{U}_{ss}}{\partial r} + \frac{1}{C_T} \frac{\partial \bar{U}_{ss}}{\partial t} = O(r^{-\frac{n-1}{2}}), \quad \bar{U}_{ss} = O(r^{-\frac{n-3}{2}}) \quad \dots (3)$$

U_{ss} : U_s の非回転場を表す、 \bar{U}_{ss} : U_s のソリント場を表す、 $U_s = U_{ss} + \bar{U}_{ss}$, $\nabla \times U_{ss} = 0$, $\nabla \cdot \bar{U}_{ss} = 0$, C_L : 縦波速度, C_T : 横波速度

ここで時間tに関するFourier変換を行うと、初期値境界問題(1)~(3)式は、次に示す定常的な境界値問題へと変換される。ここで簡単化をはかるために、物体力 $\bar{b} = 0$ と仮定する。

$$\hat{U}(x, \omega) = [\mu \Delta + \lambda + \mu \nabla \cdot] \hat{U}(x, \omega) + \rho \omega^2 \hat{U}(x, \omega) = 0 \quad \dots (4)$$

境界条件 $\hat{U}(x, \omega) = \hat{U}(x, \omega) \quad x \in \partial D_u, \quad \hat{T}(x, \omega) = \hat{T}(x, \omega) \quad x \in \partial D_t \quad \dots (5)$

放射条件 $\frac{\partial \hat{U}_{ss}}{\partial r} - \frac{i\omega}{C_L} \hat{U}_{ss} = O(r^{-\frac{n-1}{2}}), \quad \hat{U}_{ss} = O(r^{-\frac{n-3}{2}}), \quad \frac{\partial \bar{U}_{ss}}{\partial r} - \frac{i\omega}{C_T} \bar{U}_{ss} = O(r^{-\frac{n-1}{2}}), \quad \bar{U}_{ss} = O(r^{-\frac{n-3}{2}}) \quad \dots (6)$

$$\hat{U}_s(x, \omega) = \hat{U}(x, \omega) - \hat{U}_I(x, \omega)$$

3. 積分方程式による定式化

上記定常動弾性問題を、本研究ではGreenの公式による直接法により積分方程式に定式化する。また、簡単のため $\hat{U}(x, \omega)$ を $\hat{U}(x)$ と書くことにする。

外部領域Dにおいて、散乱波 $U_s = U - U_I$ に対しては、 U_s が放射条件を満足することから、次の積分表現が成立する。

$$\int_{\partial D} U(x, y) U_s(y) dS_y - \int_D T(x, y) U_s(y) dS_y = \begin{cases} 0 & x \in D^c \\ U_s(x) & x \in D \end{cases} \quad \dots (7)$$

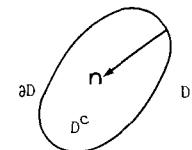


Fig.1 Exterior domain D

また、入射波 U_I に対し U_0 を D に張張次式が成立する。

$$\int_{\partial D} U(x,y) U_I(y) dS_y - \int_{\partial D} T(x,y) U_I(y) dS_y = \begin{cases} -U_I(x) & x \in D^c \\ 0 & x \in D \end{cases} \quad \dots (8)$$

(7)式と(8)式の和をとれば、全変位 U に対する次の積分表現を得る。

$$\int_{\partial D} U(x,y) U(y) dS_y - \int_{\partial D} T(x,y) U(y) dS_y + U_I(x) = \begin{cases} 0 & x \in D^c \\ U(x) & x \in D \end{cases} \quad \dots (9)$$

D 内の x なら境界への極限をとれば、境界上の点 x に対する次の積分方程式を得る。

$$CU(x) = \int_{\partial D} U(x,y) U(y) dS_y - \int_{\partial D} T(x,y) U(y) dS_y + U_I(x) \quad x \in \partial D \quad \dots (10)$$

ここに、 CU は2重層ポテンシャルのFree termであり、放射条件を満足する基本解は次のようにある。

(2次元問題)

$$U(x,y) = \frac{i}{4\mu} [H_0^{(1)}(k_T r) \mathbf{1} + \frac{1}{k_T^2} \nabla \nabla \{ H_0^{(1)}(k_T r) - H_0^{(0)}(k_T r) \}] \quad \dots (11)$$

ここに、 $k_L = \omega/c_L$, $k_T = \omega/c_T$ また2重層核 T は次のように定義される。

$$T(x,y) = U(x,y) \frac{\partial}{\partial y} \quad \dots (12)$$

与えられた入射波と境界条件のもとで、(10)式を離散化して数値的に解くことにより、境界上の変位と表面力を求めることができます。本研究においては境界要素として2次のアイソパラメトリック要素を用いた。また、境界上の応用は変位を共変微分することにより求めることできる。

4. 数値計算例

無限弾性体中に空洞が存在するモデル

Fig.2について、境界上の変位と周辺応力を

計算し、定常問題のMow &

Menteの解析結果との比較を行った。Table.1は $ak_T = 0.1$ の

SV波が入射した場合の、

$|U_r/U_I|$ と $|U_\theta/U_I|$ の比較を行った

ものである。ここに U_r, U_θ は

それぞれ境界上の半径方向、

周方向変位である。Fig.3-a,

3-bは、SV波の波数 ak_T が

0.1, 1.0, 1.5に対する $|U_r/U_I|$,

$|U_\theta/U_I|$ の比較を示したものである。

2つの解析結果がよく一致していること分かる。

参考文献

- 1). 池田秀文, 積分方程式法による地盤内構造物の動的応答特性の解析.

京都大学工学部修士論文, 1984

- 2). Mow, C.C. & Mente, L.J.; J. Appl. Mech., Vol. 30, pp 598~604, 1963

Table.1 Steady displacement fields on a circular hole (SV-wave)
 $ak_T = 0.1$

deg	$ U_r / U_I $		$ U_\theta / U_I $	
	BEM	Mow & Mente	BEM	Mow & Mente
0	0.0000	0.0000	1.0017	1.0017
15	0.2635	0.2636	0.9662	0.9662
30	0.5066	0.5066	0.8631	0.8631
45	0.7114	0.7114	0.7027	0.7027
60	0.8654	0.8654	0.4996	0.4995
75	0.9609	0.9609	0.2733	0.2733
90	0.9941	0.9941	0.1030	0.1030
105	0.9637	0.9637	0.2691	0.2691
120	0.8702	0.8702	0.4973	0.4973
135	0.7169	0.7169	0.7032	0.7032
150	0.5113	0.5113	0.8664	0.8664
165	0.2663	0.2663	0.9715	0.9715
180	0.0000	0.0000	1.0078	1.0078

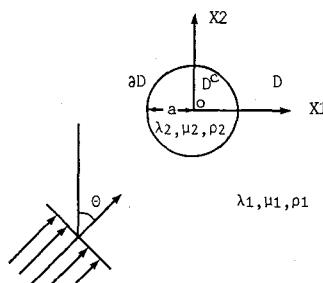


Fig.2 Geometry of the model

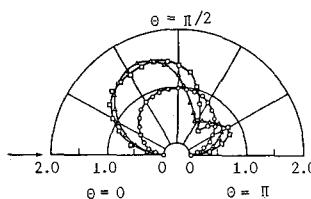


Fig.3-a Distribution of $|U_r/U_I|$ for various ak_T with $v=0.25$
— Mow & Mente ; o, ▲, □, BEM)

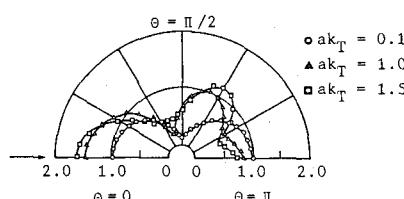


Fig.3-b Distribution of $|U_\theta/U_I|$ for various ak_T with $v=0.25$
— Mow & Mente ; o, ▲, □, BEM)